

デジタル時代の人材政策に関する検討会
第6回試験ワーキンググループ

大学等における高度試験の活用に関するヒアリング結果

令和5年12月25日
事務局

大学等における高度試験の活用に関するヒアリング結果①

ヒアリング調査の概要

- 高度試験の試験委員を務められた大学の先生のほか、Web公開されているシラバス等にて、高度試験の教材を活用されている先生や高度試験の受験を授業の目的・ねらい等に記載されている先生に対して、ヒアリング調査を実施中（現在までに2件程度）。
- 大学における**高度試験の過去問題等活用の状況**や、授業で活用できる教材等に対するニーズ、試験に対するご要望等を伺っているところ。

大学教員へのヒアリング結果①

- 30年以上、エンベデッドシステム領域の試験問題の作成に携わってきた。
- 高度試験の中でも、**ネットワークスペシャリスト**や**データベーススペシャリスト**、**情報処理安全確保支援士**の問題は、大学の授業の中で事例として活用することは可能ではないか。大学で学んだ技術が、実際にこのように使われているということを理解する上で、非常に有効である。大学での学習内容との親和性が高い。
- 一方、アーキテクトやエンベデッドは、産業界でかなり実務経験を積んだ人材を対象としていることもあり、学生が事例に取り組むには、やや難しいのではないかという印象を持っている。
- 高度試験の過去問題は、事例のうちの一部が出題されるが、**事例そのものが貴重な題材である**ため、例えば、その事例中で活用されている技術などに関するさらに掘り下げた解説などがあれば、学習素材として有益ではないか。**このような技術から、実際にこのようなものが作られているということを解説すれば、非常に面白い教材になる**と思う。教材としては、体系的なものが望まれる。
- 高度試験の作成に携わっていた大学教員を集めて、ディスカッションなどを行う機会があってもよいのではないか。

大学等における高度試験の活用に関するヒアリング結果②

- 大学には、研究志向の大学と人材育成を重視する大学があるが、情報処理技術者試験が活用されているのは、主に後者の大学。
- 産業界での実務経験を早めに学生に積ませることは非常に重要であり、そのためには**企業と大学の連携が重要である**が、大学の教員は、その点に対する意識がまだ弱いように感じる。
- 国としても、**高度試験に合格するような人材が重要である**というメッセージを、もっと強く発信すべきではないか。それにより、企業の意識も変わり、企業が変われば、大学の意識も変わっていくと思う。

大学教員へのヒアリング結果②

- 通信系企業で、ネットワーク設計やセキュリティの業務に従事。昨年からCISO補佐も担当。
- 2019年から、本学の講師として、ネットワークに関する授業を担当している。大学側からは、学部3・4年生向けに、企業でも役立つような実践的な授業をやりたいという要望があった（本学は社会人学生も多数在籍）。
- 受講者には、技術系の方だけではなく、介護職や工場の現場に勤める方なども含まれる。現場でネットワークを構築する上では、応用が利く一般的な知識や基礎知識が必要。情報処理技術者試験は、そこが重視されている。高度試験でも、**基本を理解していないと解けないようなバランスの取れた問題が多い**。基本的な領域を深く理解しているかどうか、技術者の実力の差になる。
- 自身の所属企業の中でも、情報処理技術者試験は**圧倒的にブランド価値がある**。年に1回しか受けられないため、稀少価値がとても高い。先進的な問題も出題される。現地に行って紙に書くという行為は、非効率とも言えるが本当の実力を試される。世の中に情報が出回っており、何回でも受けられる試験もあるが、情報処理技術者試験については、**内容、実施形態、合格率等も含めて、現在のブランドを守ったほうがよい**のではないかと。